No.145
公民館だより
平成24年6月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

公民館長・主事会議から

由良地区公民館長　枝川隆亮

先日、第一回目の公民館長・主事会議が開催されその会議の冒頭に横山光彦教育長が挨拶されました。

許可を得て内容の一部を紹介します。

依然、人口減少に歯止めがかからない本市の状況ではありますが、小さくても「元気な宮津」のまちづくりに大きく関わっていただき長寿・高齢化が進む地域社会の課題を踏まえ、「支えあい・助け合える地域づくり」「安全・安心の地域づくり」、「健康で豊かな地域づくり」に尽力いただいておりますことに改めて、感謝申し上げます。

とりわけ、本年度は宮津市が、「健康都市づくり」の一策として健康福祉室所管で、公民館単位での「市民の健康づくり大運動」が展開される運びとなっており、既に「公民館だより」等を通じて「インターバル速歩」についての積極的な地域への情報提供など、ご苦労いただいているところかと思っています。

教育委員会といたしましては、市長提唱の「元気な宮津」のまちづくりへの教育からのアプローチの一つとして、「宮津市民憲章」の一層の普及や「市歌」の日常化に努めてまいりました。

そうした中で、やはり環境を整えることや、気運を盛り上げることの大切さを実感した次第であります。

教育の流れ、今（雑感）

司馬遼太郎氏が日露戦争を舞台にした長編の歴史小説「坂の上の雲」の大作を世に出し、NHKドラマにもなりました。

日本と日本人の前には長い坂が青い雲に一塊の白い雲が輝いているとすれば、時代の若者たちは、その雲を見つめて、まっしぐらにその坂を上がっていくだろう。

と直情的に坂道を駆け上がる若者たちを戒める思いが「あとがき」で述べられていました。

ご存知のように、今年の一月に『下山の思想』という本がベスト・セラーになりました。作家　五木寛之氏の著書（単行本）であります。

「登山というものは永遠に続くものではない。頂上を極めれば必ず、こんどは下山の途につかなければならない。

下山は登山の終わりに向かう行動ではあるが、次の登山に続くものである。

寧ろ、下山しなければ、つぎの登山が始まらない」ということです。（以下略）

先の文章「登山というものは…のくだりは人生の生きざまに当てはまるような気がします。

人生は、山あり谷あり苦労しながら全うする。たまに笑うこともあるが、「順風満帆」に物事が運ばない時の方が多いと言えるでしょう。

コツコツと目的に向かって努力する姿勢が一番大事と思います。

前号、NO114で述べましたが「天気の良い日は歩いてみませんか。」2～3kmのコース、週3日、3ヶ月で効果が出てきます。

自分のためです。コツコツと努力しようではありませんか。

行事報告

主事　磯田充亮

◎二月四日（土）
生涯学習講座

今回は舞鶴市教委の社会教育指導員　小室智子氏（由良脇出身）をお迎えして「丹後海運を支えた由良湊」と題して講演がありました。主な内容は、『中舞鶴の旧家から発見された「加佐郡寺社町在旧記」（江戸時代享保十六年）由良村の項によると、由良湊には百三十艘が出入りし、停泊風景も記され、米等多くの産物を積み、磁石を利用し、東は出羽の庄内、秋田、西は出雲、下関等に入港し商売した記録があります。由良に田辺役所の年貢を収納する蔵があったことも記されています。又、由良の神社に奉納された絵馬からも由良には大型船がたくさんあったことがわかります。

浜田市戸ノ裏の「清水屋」に通称北前船と言われた船の停泊記録「諸国御客船帳」があり、由良の船が九十四艘記録され、由良出身者が他国船に乗って活躍した記録もあり、由良は船頭を派出する土地だったと思います。

又、由良の小林善次郎家から寄贈された古文書によると、明治十九年「宝恵丸」は三月に大阪を出港八月に北海道利尻に寄港した記録や明治二十六年「宝寿丸」は三月に下関を出港、九月に小樽に寄港した記録があります。

以上繁栄した時代がありましたが、鉄道、自動車、通信網の発達で衰退したが、先祖が残したバイタリティーはすごいものです。江戸時代のように各地方都市を結ぶ交通網を確立し地方と都市との格差解消のヒントになればと思うし、最近「北前船」ブームがあり観光資源にしようとする動きがあり、地域活性化につながればと思います。』

と講演を終わりました。

◎三月十一日（日）
自治学級（地域会議）

今年は由良自治連合会と共催で松原市会議員をお招きし開催しました。

藤本自治連合会長から（一）、駅裏の開発について、（二）、由良川河口付近の改良について、（三）、浄化槽問題、（四）、JAの跡地の利用について、等

松原市会議員から（一）、原発事故に伴う避難場所、方法の再検討、（二）、小学校跡地問題、（三）、由良浜の景観保全、（四）、府民公募型公共工事について、等、両者による現状報告があり、その後質疑応答に入りました。内容として、小学校跡地に特養ホーム建設の話しがあること、閉校にともなう記念行事を実施すること、宮津健康づくり事業を始めること、KTR由良駅の無人化が延長されたこと等の応答があり有意義な会となり、改めて由良地区の活性化を誓い閉会しました。

◎四月二十九日（日）昭和の日
第四十六回由良岳登山

雲一つない青空の元、「新聞を見た」「FM京丹後を聞いた」と福知山、舞鶴、与謝野町等地元参加者が減少する中、遠方からの参加者が増え二百一名の方に登山証明書を渡しました。

登山者は深緑に包まれた山道を登り、八合目付近の残雪を見て、山頂付近の満開の山ざくら、尾根のスミレ等を見て、変わりゆく自然を楽しみました。又、春霞に包まれた若狭湾、天の橋立を見て春を満喫しました。

今年は事前調査で今冬の豪雪で登山道に甚大な被害があることが判明し、府中丹東土木事務所を通じ業者に整備を依頼しました。業者によると一合目から頂上まで倒木一〇六本・土砂くずれ等の整備報告がありました。今後も皆様のご協力を得ながら自然を守り安全な登山道の確保に務め、伝統ある由良岳登山行事を続けたいと思います。

地域・保護者とともに

宮津市立由良小学校　校長　小奥伊善

今年度、由良小学校の学校教育目標は『ふれあい、つながり、たすけあいのできる児童の育成』です。この目標は、保護者・地域・学校が連携し合いながら、由良地域の子どもたちを育てていこうという意味が含まれています。代々、由良の子どもたちは由良の歴史や自然、普段の生活等、多くのことを地域の人たちから学んできました。そのことによって、由良に住んでいる事に誇りを持ち、次の世代に良さを伝えていく風土が定着しているように思います。

由良小学校は今年度限りで閉校になります。自然環境や人的環境に恵まれた由良で学んだ子どもたちはより大きな舞台へと進み、多くの仲間の中で、切磋琢磨し大きく成長してくれることと思います。小学校では、平成二十四年度を「心に残る一年」にするために、色々なことに取り組んでいます。

まず、全参観日の公開です。我が子が小学校を卒業すると、自然と学校から足が遠退きます。たまに、学校を見てみようかなと思っても行きにくいものです。今年度は、地区放送を利用して、授業参観日を地域の方にも案内させていただき、由良の小学校の中や授業中の子どもたちの真剣な姿を見ていただきたいと思っています。

次に文集『はまのこ』の展示です。昭和三十年に第一号が発刊(学校には在庫なし)され、今年度末で第六十号となります。当初は年に数回発刊せれていたようです。現在、図書室の前に順に展示しています。「お父ちゃん、こんなこと書いとったやろ。」と話が出た家庭もあるようです。また、学校に来られた時、『はまのこ』から自分の書いた作文を見付けられ、そっと読んで、「私のがあった。」と小さな声でつぶやいて帰られた方もありました。参観された際には是非立ち止まってご覧いただき、自分や家族、親戚、地域の方々の作文を見つけてみてください。

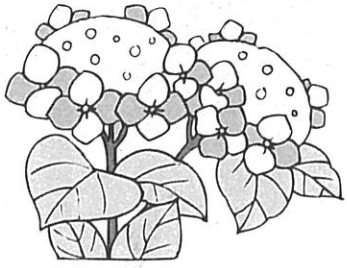
三つ目は「心に残る一年」の記録展示です。行事や日常の子どもたちの様子を校舎の玄関にて、パソコンスライドショーの形で展示しています。入学式、始業式、一年生歓迎遠足、全校遊び、桜見給食等、子どもたちの輝く笑顔でいっぱいです。来校された際には是非見ていただきたいと思います。

この他にも地域の方や保護者の皆様のご協力をいただきながら、「心に残る」いろいろな取組を行っていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

また、平成二十四年度は由良連合自治会にお世話になり、山形庄内由良へ訪問する年でもあります。由良小学校最後の年に訪問するということで感慨もひとしおです。聞くところによると、庄内由良小学校も平成二十八年に閉校するということです。今までの学校交流のまとめとして有意義なものにしていきたいと思っています。

最後になりますが、地域の方、保護者の方で、由良小学校に関係する古い写真(スナップ・校舎・入学写真・卒業写真等どんな写真でも)がありましたら、お手数をおかけしますが、小学校に持ってきていただき、見せていただきたいと思います。よろしくご協力の程お願いいたします。

このようにして、地域・保護者・学校が一体となって今年度が「心に残る一年」になるように願っています。



由良のビジョンについて

由良自治連合会　会長　中西洋一

この度前会長藤本繁光氏の後任として三月二十二日、由良自治連合会の推薦委員会（十八名）の推薦を受け四月一日引継ぎました。もとよりその器ではありませんが前向きに頑張りますので何卒よろしくお願い致します。

本年度は特別な活動がいくつか想定されます。その一つに有害鳥獣防護柵の設置、二つ目に、伝統ある庄内由良友好訪問活動、三つ目に、由良小学校閉校式と記念行事等、四つ目に、学校跡地の有効活用アクションプログラムの確立、五つ目に、原発防災訓練です。

由良自治連合会会長就任四十五日目、五月十五日午前四時三十分、下石浦に「クマ」出没の情報が入り早朝に各自治会長さんに連絡、クマは山に逃げたがどこかにでるかもと危険を感じ放送依頼したあと現場へ直行、室外機を倒し壁の鉄板をめくり床下に侵入した形跡を見てびっくり、被害にあわれた方は、身振いがするほど恐ろしい目にあわれましたが幸い事故に至らず助かりました。お見舞い申し上げます。

この事態に直面し今進行中の有害鳥獣防護柵設置の取組みを急ぐ決意を固めました。五月十八日、設置事業実施主体を確立（自治会と農家組合で構成する）年内完了を目指します。地域関係者の皆様のご協力を切にお願いする次第です。

次に庄内由良友好訪問の日程が決まりました。八月二十一日から二十四日です。訪問計画の概要は特急電車の乗り継ぎで行きます。八月二十二日と二十三日の二日間滞在し庄内由良小学校への訪問学習交流と地域の皆さんとの親善交流及び蜂子皇子が開発した出羽三山（羽黒山・湯殿山・月山）を観光し鶴岡市を表敬訪問します。訪問参加予定は自治会三名、公民館二名、小学校教員三名、育友会二名、児童高学年、由良の歴史をさぐる会会員の皆さんです。

次に小学校跡地の有効活用アクションプログラムの策定です。みやづビジョン二〇十一「平成二十三年度から十年間の長期計画」の中で中期的な行動計画として必要に応じて策定するものです。ビジョンでは二つの重点戦略を決めています。地域経済力を高めるための「自立循環経済社会構造への転換戦略」と人口減少に歯止めをかけるための「定住促進戦略」です。

そこで由良の将来を考える会を継続しいかにして定住促進を図り活性化をするため検討していただくこととします。考える会は各自治会長、市会議員、元市会議員、前市会議員、前自治連合会長、公民館長、前公民館長、婦人会長、松寿会会長、民生児童委員常務、主任児童委員、実業会会長、観光組合長、由良幼小ＰＴＡ会長、栗中ＰＴＡ会長、子供連絡協議会会長、各自治会推薦の有識者、女性、若年以上の四十名規模の会議になります。第三回由良の将来を考える会を五月二十二日に開催、出前市長室をお願いし、市長に「みやづビジョン定住促進戦略と特別養護老人ホーム」というテーマで講演を依頼、まちづくり協議を深めたいと思います。

次に、昨年三月十一日に発生した東日本大震災と大津波で二万人近い人々が犠牲になり、三十四万人余りが避難生活をしています。改めてお亡くなりになられた方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。一日でも早く復興を祈念致します。

今何が出来るか考え行動を福島第一原発事故を受けて、京都府が三月二十三日発表した関電高浜原発の事故想定では、風向きによって放射性ヨウ素の二十四時間累計被ばく量が、府の屋内避難基準（五十～五〇〇マイクロシーベルト）を越える地域が、三〇キロ圏を越えて宮津市、京都市を含む九市町に及ぶことが明らかになりました。大飯原発は高浜原発から東へ約十三キロの所にあり、大飯原発で事故が起きれば同様の被害が想定されるという。由良地域は想定外であってほしいの

ですが、こればかりは判らないことです。万一のことを考えると大津波を想定した避難訓練と原発事故の放射線による健康被害を防ぐといわれる「安定ヨウ素剤」の配布や服用の訓練が重要。安定ヨウ素剤は原発事故で放出される放射性ヨウ素による甲状腺への内部被ばくを防ぐ医薬品、福島第一原発事故では情報不足や避難時の混乱などでほとんど実行されなかったという。原発から五〇キロ圏を「放射性ヨウ素防護地域」と定められる。定められたら由良地区でも安定ヨウ素剤の各戸事前配布が予想されます。

最後に由良の戸千軒長者の館がオープンしたことに触れてみたいと思います。旧農協建物が平成十三年空家になり誰も使用しない状況が続いていました。そこで平成十五年に天上裏に入るなどして建物を調査しましたところ、まだまだ活用できることが分かり何とか有効活用ができないか模索が続き、宮津市由良診療所の完成を機に高齢者、子どものふれあいセンターとして活用する方針で考えがまとまり、海水温浴効果に期待し足湯の設備を作ることにしました。由良松寿会（会長・岸田博司）の献身的な努力もあってオープンしました。そして、市のすすめもあって国からの交付金制度の活用で先進的整備事業として認められレトロ調に改装、安寿足湯と健康サロン、丹後由良安心足湯ステーションとして利用されることとなり、感慨深いものがあります。地域の皆さんの憩いの場として利用していただくことを切にお願いする次第でございます。

あとになりましたが、平素からの由良自治連合会の活動にご協力を賜わり厚く御礼申し上げます。

この一年高齢の身にかえりみず努めさせていただきますので地区の皆様のあたたかい御支援、御協力のほどよろしくお願い致しまして就任にあたってのご挨拶とします。

時代に合った婦人会活動を…

由良婦人会　会長　松林　きみ代

日頃は、婦人会活動におきまして、地域の皆様には、ご理解ご協力をいただき、誠に有難うございます。

今年度、由良地区婦人会の会長という大役を仰せつかり、たいへんとまどいを感じております。

由良に嫁いで早や二十五年が過ぎ、地区の様子が、ここ数年、少しずつ様変わりしている様に思われます。

婦人会につきましても、私が入会しました頃は、会員さんも多く、色々な行事がたくさんありました。

本部役員さんは、忙しい中、たくさんの行事に参加され、本当にご苦労なされたと思います。私は、婦人スポーツフェスティバルやバレーボール大会に参加させてもらったことが、印象に残っています。また、社会見学旅行でも、色んなところへ連れて行ってもらい、楽しい一日を過ごさせてもらったことを憶えています。

現在の由良婦人会は、三地区が脱会され、浜野路、宮本、脇の三地区だけで活動しています。定年を迎えられた方が次々と退会され、新入会員さんの入会はほぼゼロに近い状況です。

「もっと、積極的に勧誘を」と思われるかもしれませんが…。仕事を持っておられる方も多く、なかなか入会してもらえる方がありません。

この少ない人数の中で、今までのような活動をしていくことは大変、困難な状況にあります。このような状況の中で、今年度どれだけ、地域へ貢献できるかわかりませんが、他の役員さんと力を合わせて、少しでもお手伝いできるように頑張りたいと思います。

地域の皆様には、昨年同様、ご理解、ご協力の程、よろしくお願いいたします。

由良小学校最終年

由良子供会連絡協議会　会長　室澤泰人

この度、由良子供会連絡協議会会長を務めさせて頂くこととなりました。

この大役を務めることとなり、何分力不足ですが他の役員達と協力の下精一杯取り組んでいきたいと考えております。

由良地区の皆さんには日頃から連絡協議会の活動に対してのご支援ご協力を賜りまして有難うございます。

連絡協議会の活動で五月にUSJに親子遠足に行ってきました。日頃お忙しいとは思いますが多くの参加があり子供達との共有の時間を過ごし楽しい思い出の一つになりました。

また、防犯活動に関しましては、日頃より駐在様・地域の皆様の協力もあり感謝しております。最近のニュースでもよく登下校・商店街の中での暴走事故などもありました。

大変恐ろしく、悲しい出来事が聞かれます。

今まで以上に防犯活動に皆様のご協力をお願いしたいです。

皆様もご存じの通り少子化に伴い児童の減少の為、本年度をもって歴史ある由良小学校が閉校になります。次年度から栗田と統廃合での学校生活になります。

歴史ある由良小学校が無くなることで、これからの由良子供達の将来にも影響が少なからずあるとおもいますが、今まで由良小学校で学んできたことに誇りを持って進んでいってほしいです。少人数での学校生活でしたが、在校生増加で慣れない環境や対人関係等多くの不安があるとおもいますが、何事にも自分自身冒険（チャレンジ）して失敗を恐れずに取り組んでほしいです。成功すれば自信にも繋がり、失敗しても今まで気づかない事を気付いていく事も必要であります。

私事ですが、実家は栗田でありまして少し複雑な気持ちではあります。

実家に帰っているときに感じる事ですが、「中学生登下校時に向こうから気持のよいあいさつをしてくれる事があります。よく見ると由良の子供たちで小学校で学んできたことを自然に行えている事の一つであります。」挨拶をされる側としては気持ちの良い事ですし今まで学んだことを率先して行えている事がすばらしく感じています。

最後の由良小学校在校生として多くの事を学び・体験・経験して学校生活の充実を図り、これからの人生の中の一つであり、何年後何十年後にも由良小学校の事を語りついでいってほしいとお願いします。

最後に由良地域の皆様・由良小学校教員様・最後の学校生活を充実した毎日であるようにご協力・ご指導の程よろしくお願いします。

由良小学校（グラウンド側）

由良小学校（校門側）

就任のご挨拶

栗田中学校ＰＴＡ会長　蒲　原　順　一

風薫る、すがすがしい季節になって参りました。

由良地区の皆様には、日頃より栗田中学校ＰＴＡ活動に対しまして、ご理解とご協力をいただき、ありがとうございます。特に春と秋の資源回収や、体育後援会賛助会員として温かいご支援を賜りまして、心より感謝申し上げます。

この度、栗田中学校ＰＴＡ会長と体育後援会副会長を務めさせていただく事になりました。昨年の由良子供会連絡協議会会長に引き続きの大役となり、戸惑いもありましたが、子ども達がより良い学校生活を送れるように微力ながらも取り組んで参りたいと思いますので、よろしくお願い致します。

さて、栗田中学校の現状ですが、この春、二十名の新入生を迎えて全校生徒六十九名となりました。生徒数減少の中、ＰＴＡ会員数の不足により今年度から、先程紹介させていただきましたように、役員はＰＴＡと体育後援会を兼務する事となり、定数の削減が行われています。そんな中ですが、子ども達には充実した中学校生活を送れるよう、出来る限りの支援活動を進めていきたいと思いますので、お力添えをいただきますよう宜しくお願い致します。

子ども達は勉強に、部活に、各委員会活動等にと、精力的に頑張っています。部活の選択肢が少なかったり、大規模校と比べると競争心が希薄になるという危惧はありますが、小規模校なりの良い点もあると思います。各自の果たす役割が重要になり、そこにやりがいを感じたり、少ないからこそ、お互いが協力し合い学校としてのまとまりも良いように感じます。

また、学習の面でも生徒一人一人に対して、より目が行き届き、教科によっては学力に応じた指導と充実した環境で勉強が出来ているのではないでしょうか。

世間では大きな問題を抱えた学校もある中、比較的落ち着いた雰囲気で生活が出来ていると思います。この「今」がありますのも、家庭での躾は言うまでもなく、学校での先生方の指導と、これまで幼少期より温かく見守ってくださる地域の方々と接するなかで育てられたからだと思います。

この由良の良い風土の中で、これからも子ども達が、より成長してくれる事を願ってやみません。

最後になりましたが、本年度の大きな行事と致しましては、九月八日（土）に体育祭、一〇月二八日（日）に文化祭を予定しています。

開催が栗田という事で由良地区の皆様にはご不便かと存じますが、子ども達の活躍、頑張りを見に来ていただけるとありがたいです。

今後とも栗田中学校ＰＴＡ活動への、皆様のご理解とご協力をお願い致しまして、ご挨拶とさせていただきます。

由良岳東峰頂上（若狭湾を望む）

就任のご挨拶

由良小学校
由良幼稚園　ＰＴＡ会長　田村光広

由良地区の皆様には日頃より由良小学校・由良幼稚園の児童や園児に対して温かく見守って頂きありがとうございます。また、登校時・下校時にはボランティアの皆様や由良子ども安全見守り隊の皆様には交通安全もお世話頂き本当にありがとうございます。

今年度は幼稚園には新入園児がいなく寂しく始まりましたが進級した園児達は元気いっぱい先生方や地域の皆さんと上級生として活動していると思います。また、小学校には今年度は四名の新一年生が入学してきました。近年では十名以下の児童は当り前の様に感じているかも知れませんが、やはり少なくさみしく思います。しかし来年度からは皆さんご承知の通り由良小学校と栗田小学校と統合が決まっています。いままでと違って友達が増え活動範囲や視野が広がり知識が増え今まで以上に由良の子達がたくましく元気になっていくと信じています。まずそれには、始めに書かせて頂きましたが地域の皆様の御協力なしでは難しいですので統合というこの機会をチャンスと捉え、さらなる御協力を宜しくお願いします。私達保護者も、皆様から色々な知識や、ご指導いただき一緒になって、地域を子供達を活気づけていきたいと思います。

最後になりましたが、由良小学校ＰＴＡは今年度で終わると思いますが由良幼稚園はまだ残りますのでこれまでと同様由良小学校・由良幼稚園のＰＴＡ活動へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

由良がたけと山

六年　岡本凌輝

由良がたけとざんがありました。ぼくは前の日からずっと楽しみにしていました。

学校にしゅうごうして体そうをして、キャラメルとあめをもらいゆらがたけにしゅっぱつしました。ぼくはしんやくんとかいえくんとしょうごくんとよしきといっしょに登りました。最初はゆっくり登りました。昨年よりえらかったように思えました。けっこう先が長かったので休む事もしました。何回ものぼった事があるので見たことあるけしきもありました。やっと九合目につき左のちょうじょうがちかい所へ行きました。今年はえらかったのでたっせいかんがありました。ちょうじょうでけっこう休み、おべんとうをおなかがすいてなかったのですこしだけたべ下にむかっておりました。おりるときは足がいたかったです。

ひさしぶりにゆらがたけをのぼったけどやっぱり楽しかったです。

由良がたけと山

六年　室澤戒依

ぼくは一～三合目までが、けっこう早くかんじました。木がいっぱいある所からぜんぜん先に進んだかんじがしませんでした。五合目らへんから、足が歩くたびにいたくなってきました。ぼくはつかれて休けいをいっぱいとっていました。ぼくは八合目ぐらいで水とうがからっぽになってのどがからからになっていました。ちょう上についたのはいがいと早かったです。小っちゃい子も早くのぼってきて、すごいなと思いました。

がんばった由良ヶ岳登山

五年　上羽省吾

ぼくは、由良ヶ岳は、毎年登っていて、由良ヶ岳のつらさは、知っています。

ぼくは、りょうき君とかいえ君としんや君とよしき君とぼくで登りました。

登り始めにぼくは、つえにする木を持ってなくて、登りづらいように思えました。でも登る時には、つえにする木が見つかってよかったです。

登り始めは、みんなについていけていたけど、後になってきたら、坂が急になってきて、みんなについてはいけていたけど、足が痛かったのとえらかったです。でもみんなに

「ちょっと休も。」

と言ったら休みをとってくれてがんばれました。ぼくは、お茶が無くなりました。でも、ポカリスエットを持ってきていたので、だいじょうぶでした。

頂上に着いたら、

「やったあ。」

と思いました。頂上では、友達とシートをしいていっしょにおべんとうを食べました。おべんとうを食べて、おかしも食べました。おいしかったです。

頂上から下りる時、西の方へ行きました。登り坂があってつらかったけど、ぜっけいポイントまで行けて、ぜっけいが見られてよかったです。

下りる時は、くだり坂であまりつらくないと思ってたら、急な坂だったので、つらかったです。

でも頂上で見たけしきは、きれいだったので、来年もがんばって登りたいです。

由良ヶ岳登山

五年　大石真也

由良ヶ岳登山があってそれに参加しました。

ぼくは、りょうき君とよしき君とかいえ君としょうご君でいきました。たいそうの時にはハチがとんでいました。

ぼくはかぜぎみだったので初めらへんでいきなり疲れてきたのできゅうけいしました。

七合目ぐらいについたら上山先生がうしろに見えていそぎました。でもみんなつかれてちょっと間休けいをしました。そのときに先生に写真をとってもらいました。

九合目のわかれみちで左へいって頂上についたらべんとうをたべました。でもおなかがへってなかったのでおにぎりを一つのこしました。おりるときはつま先がいたくなりました。

またのぼりたいです。

平成23年度 宮津市人権標語入賞作品

ありがとう　みんなにこにこ　うれしいな　（小学一年生）

いっちゃだめ！　自分が言われて　いやなこと　（小学四年生）

ごめんなさい　すなおに言えたら　百点満点　（小学五年生）

大丈夫？　一人でなやまず　うちあけて　（小学六年生）

川柳

宮津番傘川柳会　大森美智子

モナリザの　笑みはトリック　かも知れぬ

潮騒が　遠い昔を　連れて来る

コスモスの　乱舞が過疎を　かりたてる

空き缶ころころ　地平線まで　転ぶのか

塗り替えた　橋が他人の　顔をする

坂本妙子

やさしい心　包んで雲は　夕焼ける

沈丁花　私を誘う　昼下り

列の中に　安泰きめて　いる狡さ

短歌

由良　枡本　清

大津波　瓦礫と家が田を走る
ニュースはさながら　この世の地獄

大津波　我が家の屋根で漂流し
二日目に救助の　明るいニュース

燃えさかる　夕闇天に精霊さん
大の字くっきり　古都の送り火

久方に　信濃の岸にたたずめば
古志の山脈（やまなみ）　八海白し

坂本妙子

島々が　かすかに浮かぶ　雨の午後
若狭の海は　風ぎてゆたけし

静かなる　海にむかいて　ゆったりと
心たゆとう　ひときの我

庭に咲く　ずおうもくれん　散りゆきて
若葉にあふれぬ　春真中なり

「古事記」誕生と大丹波分国

京都丹後学会会長
丹後ふるさと観光大使　坂本与一郎

古代丹後水軍の活躍

籠神社には、亀に乗った像があります。あの人を頭領とする丹後水軍の男達は、日本海と日本列島を自由自在に乗り切って、どこにでも現われたのです。丹後の妃達には、随分魅力的だったそうです。海の悲劇も多くあったし、お伽草子の浦島太郎(丹後と日下部豪族の伝承、浦嶋神社)のような話も多かった。

「縄文期から培われたすぐれた航海・造船技術を持って、漁業、海運、商社機能を持った海の軍団を駆使し、倭宿彌命(ヤマトスクネノミコト)、古事記の神武東上説話に出てくる浦島太郎)は、丹後王国の経済力を作り上げた。そして、その力を持って、大和の国づくりに進出したのです。まさに神武的働きをしたのです。」(伴とし子著作「古代丹後王国は、あった」東京経済刊参照)(籠神社蔵・国宝「海部氏系図」参照)

かぐや姫と大和後宮

丹後の女性たちが大和に最初にかかわったのは、天照大神の斉宮(いつきのみや)へ入ってからでしょう。

欠史八代という時代。古代の戦国期を終え、大和の国造りが見え出したのが、九代開化(かいか)天皇のころからです。丹後王国の援助で、大和が力をつけてきたころです。

由香里の姫、竹野(タカノ)妃が、皇后として後宮に入ったのです。

それから百年以上は過ぎています。衰退する葛城王朝の中で育ちました。父は、戦さで亡くなりました。

竹取の翁(讃岐〈さぬき〉氏の長)と、竹林の中で、ひっそりと隠れ住んでいたのです。(広陵町は、〝かぐや姫のまち広陵町〟として町起しを行なっている。そのパンフレット〈広陵―古代浪漫をしのんでみませんか―〉参照)

その後、十代崇神(すじん)天皇から、随分言い寄られましたが、好きになれず断わったのが、後世、物語に書かれているのです。

結局、葛城の残された人々のことを考えて、私は、十一代垂仁(すいにん)天皇の後宮に入りました。そこには丹後からの竹野妃たちもいたのです。

日子座王(ヒコイマスメノミコト)の丹後鬼退治

大和王権では、皇妃の長子男子が、後継者として〈文〉を司どる。開化天皇の後継者は、崇神で、異母兄弟の日子座王は、〈武〉を担当することになっていました。

そのころ、丹後では、青葉山(六九三m、若狭富士)付近に鬼〈土蜘蛛、陸耳―くがみみ〉が出没、皇子に退治命令が下る。日子座王の古代丹波越えである。

鬼達は、成生(鳴生)から河守(川守)へ、由良川沿いの戦いになる。辺り一面が血の海になったので千原(血原)。敗走する鬼達は由良港へ。船で追ったが、由良港の手前で見失う。日子座王は、石を拾って占ったところ、与謝の大山(大江山)に逃げ込んだことが分った。そこの地名が石占(**石浦**)となった(丹後風土記残欠)。

鬼を撃ちとった日子座王は、氷沼(ひぬま、涸沼)すなわち福知山に本拠地を構えるのです。」(岡井主税著作「丹波、丹後の伝説遍歴」文芸社刊)、(風

土記：四十三代女帝元明天皇の命で七一三年の諸国で編纂された官撰地誌。現存するものは五ヶ国分で、しかも完全なものは出雲国だけである。散逸したもののうちからかろうじて他の文書に引用されたものを「逸文」として伝存する。）

初めて天下を治めた天皇（ハツクニシラスメノミコト、初馭天下天皇）の称号を持つ崇神天皇は、その後も、全国に四道将軍を派遣し、大和王権の拡大につとめたのです。丹波道を担当した丹波道主命（タニワノミチノヌシノミコト）は、日子座王の子供といわれています（古事記は同一人物説）。そして、丹後の川上摩須郎の娘を娶（め）とっているのです。その間には一男三女があります。

大和後宮、丹後の〝妹（いも）の力〟

大和王権は、丹後王国との関係を保つために必死でした。皇統にとって、妃となる女性は、丹後国の系統でなければならないという必然性があったのでしょうね。

第十一代垂仁天皇の後宮には、鬼退治で丹後へ入った日子座王の娘狭穂（サホ）姫が皇妃としてあがっていたのです。

皇妃の兄、狭穂彦は父日子座王の果たせなかった夢、天皇の座を賭けて、天皇暗殺を、狭穂姫に命じたのです。

『果せず、兄と共に炎の中で死ぬのですが、その時垂仁天皇は、次に誰を妃とすればよいと問いました。狭穂姫は「丹波比古多須美智宇斯王（たにはのひこたたすみちのうしのみこ、丹波道主命）の女（むすめ）名は兄比売（えひめ）、弟比売（おとひめ）、浄き公民（たみ）なり。使いたまふべし』と答えている（古事記、日本書紀）。

「この事件のあと、垂仁天皇は丹波道主命の子供で、三人の姉妹が後宮に入ったのです。その内の一人、日葉酢姫（ヒバスヒメ）が皇后となり、第十二代景行天皇を生んでいるのです（古事記）。

また、もう一人は、『形姿醜きに因りて、本土（もとのくに）に返しつかわす』という事態となり、丹後への帰途、落胆し自殺をはかり、輿（こし）から落ちて死んだといいます。（相楽郡と乙訓郡の地名は、この事件から付いた）。」

第十二代景行天皇の皇妃も丹後から入っています。そして、その子が日本武尊（ヤマトタケル）となるのですが、天皇から遠征を命じられ苦労するのですが、丹後の応援を得られなかったのか苦戦の連続で、大和へ帰還中死にます。丹後の妹の協力が得られなかったのか、兄を殺したことが災いしたのでしょうか。

十五代応神天皇もまた、ハツクニシラスメラミコトといわれています。

神功皇后が、竹内宿彌に生ませた子という俗説があります。第十四代皇后の夫仲哀天皇は二人に暗殺されたといわれています。皇后もまた日子座王の血統で、新羅王系の天の日槍の血が入っているのです。

朝鮮遠征中、出産を遅らせるために石を当てて陣頭指揮したという女傑だが、その子応神は、九州から東上にあたって、丹後へ入婿した形跡があります。

応神天皇は、天の名を『イザサワケノミコト』だが、敦賀の気比神社では、『ホムタワケノミコト』という名前で祀られている。日本書紀応神紀にある名前変えの記事。応神が大和に登場君臨するにあたって、丹後久美浜町品田（ホンデ）にゆかりのある豪族ホムダマツカの三人の姫を妃として、大阪灘波に建国したというのが、伴とし子説である。」（伴とし子著作「古代丹後王国は、あった」東京経済刊参照）

大和、国譲り政策

十一代垂仁天皇が丹後に入婿した時代と違い、十五代応神天皇の入婿では、大和の状況は大きく変っていた。丹後王国に、大和は力で勝るようになっていた。丹後の大和に対する国譲りが行なわれたことになるのです。

但馬の国に移り住んでいた新羅の王子天の日槍（アメノヒボコ）の曾孫清彦（キヨヒコ）に対して、垂仁天皇から『この国にやって来た時の羽太(はぶと)の玉、出石の小刀など七種の宝物が見たい』と、神宝の献上が命じられました。これは、朝鮮系の有力渡来氏族が、大和政権に屈服したことを意味するといわれています。日槍は、但馬の出石神社に祀られています。

出雲の大国主命（オオクニヌシノミコト）が、天照大神に、日本の国『大八洲(オオヤシマ)』を国譲りしたように、大和は戦わずして従える大国の軍略が使えるようになってきたのです。

応神天応は、丹後王国にとって引導を渡した天皇となったのです。海人族（アマ）は、海部族（アマベ）となりました。丹後の豪族達の姫たちも後宮へ入ることもなくなりました。

大型前方後円墳が、唯一丹後王国の隆盛の証しであり、大和の協力なしでは出来ることはなかった関係の証しです。古墳には埋葬者の名前は書かれておりません。その副葬品などが、丹後の王達の証しになっているのです。丹後は縄文、弥生、古墳時代と続いた繁栄の時代を経て、その役割を終えたのです。聖徳太子から始まる仏教伝来による歴史遺産は、大和を中心とする内陸部に譲りますが、丹後の場合その異母兄弟、麻呂子親王の鬼退治遠征に始まる進出によって仏教文化数多く定着花開くことになる。

竹取物語と藤原不比等

丹後の王国の豪族たちと、その妃たちの王権獲得競争でスタートした大和は、物部、蘇我、藤原などの争いの中で、やはり〝妹たちの力〟でエスカレートしたのです。そしてそれをパーフェクトに完成させたのが、藤原不比等なのです。

四十二代文武天皇は、藤原不比等の娘、宮子を皇妃として、のちの四十五代聖武天皇を生むのです。

宮子は、皇子の聖部を生み落した直後から、不比等邸に幽閉され、聖武に再会できるのが、三十数年後だったという。

不比等を引き上げたのは、四十一代持統女帝（天智の娘、四十代天武の皇妃）です。鎌足と不比等父子は、トップを望ます、ナンバー2のポジションに満足し王権を支え続け、大豪族を排し、最後は〝妹の力〟によって、天皇の外戚となって、実権を握ったのです。

多くの滅ぼされていった豪族達のウラミ、ツラミが、平安前期の歌人、紀貫之によって書かれたと、私は承知しております。もちろんゴーストライターでなければなりませんから、名前は伏せられましたけれども―。

かぐや姫にフラれた、車持皇子のモデルは、藤原不比等といわれています。

紀氏は、八、九世紀にかけて中央で勢力を伸ばし、藤原氏にらまれ、八六六年応天門の変に連座して失脚した。

「古事記」誕生から、今年は千三百年になる。

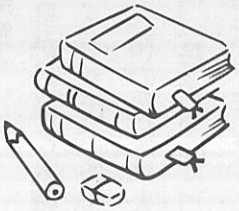
神代から推古天皇の代までを内容とする。全体三巻、中巻以降で語られる天皇の時代は、主役は、丹後の王妃達の物語りである。九代開化天皇王妃、十一代垂仁天皇王妃タカノヒメ達、垂仁（スイニン）天皇妃サホヒメ、神功（ジングウ）皇后の新羅（シラギ）遠征などヤマト王

権確立のドラマチックなエピソードがちりばめられているが、「丹後、あるいはタニワ」という地名がかき消されている。

「古事記」編さんを命じたのは第四十代天武天皇で、幼名「大海人皇子（オオアマノミコ）で、海人（アマ）族のながの主力の汎海（オオシアマ）族が養育した古代最強の天皇といわれている人である。

古事記完成またずに亡くなった天皇のもとで推進した藤原不比等の海人族、地方豪族つぶしの陰媒性すら感じるのである。

この後大丹波（タニワ）は、三ヶ国分国されるのである（七一三）。



ノスタルジー

小西　衛

かぐや姫の歌に『僕は何をやっても駄目な男です』という曲があります。作詞・作曲／南こうせつ

触りの部分だけ書きますと、♪〈僕は、何をやっても駄目な男です。夕べ歩いていて、犬におしっこを架けられました。〉

小学生の頃、僕はちょっと小高い所にある野村君の家（石浦）に、宝物を見せてあげるという事で、遊びに出かけたのですけれども、宝物を見せてもらって、もう他に何んにもする事も見当らないし「じぁ帰るわ」と、言ってボロボロの自転車にまたがって、少し急な坂を下って行ったのですね。「しまった」五十メートルぐらいある坂道の中頃で気づいたのです。僕の自転車はブレーキが効かないことを……。「止めてくれー」と大声で叫んだ、その瞬間、坂道の終着にある家の正面玄関に自転車ごと体当りしてしまったのです。（痛）

身体が痛すぎる、九才の春の日でした。

中学二年の頃、部活が大会前という事もあり、野球部の全体練習が終わった後、一人でトレーニングをやろうと夕暮れどきの寂しい音楽室に行ったのですけれども、ドアを開けて正面上を見ますと〝ベートーベン〟の（写真）目がピカッと光っていたのですよ。

当然、僕は一目散に逃げて、逃げて、どうやって家に帰ったのか記憶が定かではなかったのです。怖い出来事でありました。

次の朝、〝怖いもの見たさ〟という思いで由良駅で始発電車に飛び乗り、風を切るように走って、音楽室の前まで来て一回大きな深呼吸をしてドアを開けたのです。

「あーあ」〝ベートーベン〟の目には、ガビョウがさしてあったのです。「もう本当に参ったなぁー」という気分と共に「お前（犯人）は、いったい誰れだ」という感じでした。（笑）・（怒）

こういうカワイクないイタズラは、良くないのですと思った、十四才の夏の日でした。

高校生の頃、仲間の知識を学びとるレベルの高さに驚く日々の中で、又しても、と言いましょうか、大嫌いな数学の授業が直に訪れて来るわけですけれども、ミスターKは、順番に当てていく先生でありました。

当然、僕も答えていかなければなりませんね。先生「これをやってみなさい」　小西「この答えは○×です」するとミスターKは大きな溜め息をついたあと、教壇から下りて窓際に行き（3F）「ジャコビニ流星が飛んだ」と、言われた。（七十

年に一度地球に接近する流星か？　それともウルトラマン・シリーズか？（笑）それからは数学者に飼い慣らされることは、無くなったのですが、〝青春の痛み〟というのか、数学の授業になると寂しさだけがありましたね。

顔から火の出るような失敗をした、十六才の秋の日でした。（恥）〈人は皆、顔から火の出るような失敗をまき散らし、それを笑い話に変えながら生きていく。竹内　政明〉

夜学（二部）の頃、一年・二年の時代は、アルバイトで新幹線食堂車の清掃をやっていたのですけれども、その日の仕事は可成りキツイものがあったのでしょう。

講義の途中で睡魔が襲って来まして、ぼく睡してしまったのですよ。

気がつくと、〝午前零時の神田街〟どころか午前六時の大学校内（7F）講義室でしたよ。

「ああ、腹へった！腹ペコだ！」そんな遣る瀬無い、泣きたいくらいの十九才の冬の日でしたよ。（涙）

今、僕は思っています。

昔（過去）を懐かしんで、郷愁（ノスタルジー）にひたるのも、前向きではないにしろ、後ろ向きでもないんじゃないかと、楽しいものではないかと思えるのです。当然、もちろん失敗談だけではなくて（成功談なんて書いたら、誰だってへき易しますよね）〝昔の歌〟〝ふるさと〟〝学校時代〟〝勝手きままの旗たてて酒を飲んだ昔〟などなど、現実逃避としてではなくて、過去を追憶して、エンジョイしてみたくなって来たのです。

エンジョイするには、ひとりで思うのが良いし、又、敬老時代でないと、ノスタルジーにはひたれないでしょう。

僕は、残念ながら今はまだ〝一時停車〟中ですから……だからひたれるのですね。

〈人が歴史に惹かれるのは、そこにノスタルジー（郷愁）を覚えるからであり、そしてまた、古い流行歌をきき、今はなき、町のたたずまい、人々のざわめき、自然の姿などがまざまざとよみがえってくる〉と、五木寛之先生は、『下山の思想』の中で説いています。

この五木寛之氏の言葉のおかげで、公民館だより、丹後由良の史跡、四方寿郎写真集を振り返って読んで、見た時、僕は、ノスタルジー（郷愁）という想いが解って来たような、そんな気がしました。

幸せの青い鳥は、身近な所に居てくれるだけではなくて、自分の過去にも居るのです。

小学校玄関にて（S30年卒業写真）

由良小学校に関係する古い写真を探しています。

（スナップ・校舎・入学・卒業等）
お持ちでしたらお借しください。

由良小学校・由良小PTA・由良自治連合会・
由良地区公民館・さよなら由良小学校の会

若狭越前海岸を歩く（最終版）

四方俊一

鮎川公園の東側は国見岳（四五六米）。中世時代（建長二年一二五三）は平安京の近衛家の所領で都へ海産物を供給していたと伝えられていた。その後、近世に入ると福井藩領となり、次いで幕府領となったと伝えられている。集落に入ると国見小学校、中学校、保育所等が有り新しい団地の造成もなされていた。三〇分も歩くと菅生集落に入る、もちろん海岸部は小さな漁村が続き平穏な景色である。「越前雲丹」、「蟹」の銘品を産出してきた所である。所で、この辺一帯は国見岳の山麓地帯で越前一条谷城主朝倉義景（湖北の小谷城主浅井長政と連盟して織田信長と争い、再三の合戦に敗れた）が永禄四年（一五六二）「犬追物」（囲いをした野に犬を放ち、馬上から鏃を着けない矢で犬を射る）を盛んに行った地域だと云う。「長橋」「糸崎」地域は三六坊（寺の施設で僧侶住居、寺院、わき寺）の塔頭が有り栄えたが一向一揆によって衰微したと云われている。この寺に朝倉義景は「犬追物」する時に宿泊した。当然、家臣も各々の坊に宿泊したと云う。そして朝倉義景の一句が残されている「西の海入日の色も紅に寄来る波や糸崎の浦」と詠んでいる。この「犬追物」は全国各地の藩で徳川時代に行われて家臣の活気付にされた。先程の歌にもある様に日本海に沈む夕陽は見事なもので多くの人々が認知する所であり、能登半島にかけては見所が方々にある。さてその沈みゆく夕日の方向に「亀島」と云う島がある。天平勝宝八年（七五六）唐僧の禅海が大亀に乗って千手観音を奉持して、糸崎浦に至った時、近隣の浦人は七日七夜沖に光るものを不思議に思って当島に引寄せたことから「亀島」と云うようになったと云い、一方、糸崎寺縁起（同寺文書）には、糸崎寺の本尊となる観音像を、海底からその背に乗せてきた「万歳緑毛の亀」が留まった島で、以来、亀島と名付けられ、「蓬莱仙女の住し給う霊島なり」と解説板にあった。そして足は小さな集落「松蔭」を通り「和布」を過ぎ「免鳥」集落の山手側の国道三百五号線を歩く。免鳥集落から北へ砂浜が広がり、製塩が盛んになった地域である。慶長三年（一五九八）頃から製塩が盛んとなり、福井県の南東部に位置する「大野」城下迄、塩を運送していた。そして鰯漁も盛んで製塩に次ぐ産物であったようだ。又、廻船業を営んでいた形跡も残っている。さて、ここで「朝倉氏」について記述してみたい、「日下部」氏は古来、伊根町の本庄に在住していたが但馬の北部に在住したと但馬史に記されている。その但馬国（兵庫県）の日下部氏を祖先とし、平安時代の末、朝倉宗高にいたって初めて朝倉の苗字を用いるようになったと云う。宗高の子高清には七人の子があって、奈佐氏、八木氏、田公氏、松田氏など多くの分家が生まれ、高清の一族は但馬国一円に繁栄した。越前朝倉氏の祖は、高清から七代目の広景である。元弘の変（一三三一後醍醐天皇が鎌倉幕府討伐を企てた内乱）の時、広景、正景父子は足利高氏の下に馳せ参じた。やがて南北朝の争乱（一三三六）が起ると朝倉氏は足利氏の支族「斯波高経」のもとに配属されて越前に移り「足羽庄（福井市）」代官職を得た。故に朝倉広景、正景、氏景、貞景、教景、家景、孝景、氏景、貞景、孝景、義景と十一代にわたり続くのである。朝倉一

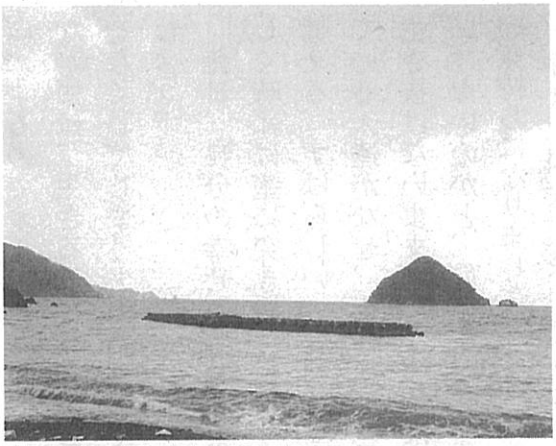
族は斯波氏に仕え、長禄三年八月十一日越前に於ける合戦で孝景は活躍し、一担は越前国守護職に斯波氏が着任するが「応仁の乱」（将軍の跡目争に各守護が東西に別れ争乱した）の時、西軍に属して活躍したが文明三年（一四七一）越前の守護権掌握を条件に東軍に寝返えり、越前平定に乗り出したのであり越前守護として八代目、氏景（六年間）、貞景（二七年間）、孝景（六四年間）、義景（一八年間）と隆盛期は百拾五年間で終了した。永禄八年（一五六五）将軍足利義輝は、逆臣松永久秀に殺された。弟の一乗院門主（奈良興福寺）覚慶は還俗して義秋と名乗り、翌年松永の追跡を逃れて近江から若狭に入る。しかし若狭は当時武田義統・元明父子が両派に分れて抗争していたため武田氏を見限り、越前朝倉氏を頼って敦賀まで居を移したが朝倉氏も多事多難であった。すなわち永禄十年（一五六七）越前国坂井郡の豪族堀江氏が加賀の一向一揆の後援を得て反乱を起したのである。しかし、年内には若狭も平定し、堀江氏の変も収めた、十一月二一日ようやく足利義秋を一乗谷安養寺に迎えることができた。朝倉義景は十一月二七日に足利義秋の宿所を訪問し、翌十二月には返礼として義景屋形へ伺っていた。そして朝倉義景は足利義秋の観侍に努めたが翌年（永禄十一年）四月征夷大将軍となった義秋は朝倉義景の元で元服し「義昭」と改名した。そして義昭は優柔不断な義景を頼むに足らずとして、七月美濃の織田信長のもとに移った。永禄十一年（一五六八）九月、信長は義昭を奉じて上洛（京都へ登ること）した。そして義景にも上洛を促したが、義景はこれに応じなかったため、朝倉氏と織田氏のとの宿命的な対立が始ったのであった。そして湖北の小谷城主浅井長政と組み織田信長に対抗するが力及ばず敗れて越前国大野城下の賢松寺において自害し滅亡した。四一歳であった。このように越前と朝倉氏は中世において密接な関係が有り、又、越前にも係りがあったのである。国道三百五号線の川尻地区に達する。北西に三里（約十一キロ）の砂丘が広がり、石橋集落の西南にあたる。製塩が昔は盛んであったようだ。現在は製塩に変って辣韮作りが盛んであるがビニールハウスも点在している。ここから三国湊まで九キロ、二時間と見る。現在時計は午後四時、急いで歩けば三国駅に午後六時に到着できる。古来より「三国湊」として発展し、竹田川と九頭竜川の合流する右岸に位置し、北前船の船が行き交う時代になると北は北海道から南は九州の産物までを扱う湊として発展してきた。その「三国」の名はすでに「日本書紀」、継体天皇（二六代目）即位前紀に、天皇の母、振姫の居住地として「三国坂中井」が記されており、又、その後の「日本書紀」や「続日本書紀」には三国公・三国眞人と呼ばれた豪族がしばしば登場してきます。「続日本書紀」和銅二年（七〇九）七月一三日条に、蝦夷地出兵に当り、越前、越中、越後、佐渡の四ヶ国から船百艘を挑発した記事が見え、当湊も船を出したものと思われます。又、宝亀六年（七七八）九月二日高麗使正六位上高麗朝臣殿嗣が坂井郡三国湊に着いたと記されており、古くからの湊であった。「中世」の当湊は奈良興福寺領に属した。そして江戸時代、寛永三年（一六二六）「沖の口法度」（湊を管理する法）が発布され、湊出荷物の品目、寸法等の規定の他、荷物の陸揚げ、船積みを行う場所や取扱い方も規定され、越前北部にある唯一の湊として、福井藩の保護統制下にあった。寛永二十年（一六四三）幕府より異国船改めの励行を命じられたのを機に、当湊と北の滝谷出村との境に口留の番所を

置き、三国湊以外の浦に来た船も番所前に呼び寄せ検問を行うようになった。河口港であったため、川底に土砂が堆積すること多く、水戸口で難破する船も多くあり、元禄十三年（一七〇〇）より水戸口には水戸印の舟を置いて他国船などが入港するときには案内をした。なお、「三国鑑」（国立資料館蔵）は当湊からの各地の湊への方向、里程を次のように示している。「丹後文珠山（宮津市）海上三十五里（約百四十キロ）晴天には見渡し可・西の方丹後（伊根町）経ヶ岬海上四十里（約百六十キロ）・西戌方（西北西）隠岐国（島根隠岐島）海上百里（約四百キロ）等々記されているが「キロ」は後日明治以降の数字と思われる。昔も今も変らず天候の良い日は肉眼で丹後半島が望めたようだ。天正三年（一五七五）織田信長の越前平定の際、当湊の富豪森田三郎左衛門は織田信長に協力し、越後上杉氏の動静などを伝えていた。以後、柴田勝家、豊臣秀吉、前田利家が治めるところとなった。元禄十二年（一六九九）の三国湊明細書では家数七三九戸、北前船十四艘、川舟三五艘となっている。湊への商品の出入を監督するため「三国湊口止番所」が置かれた。正保元年（一六四四）異国船改めとして見晴らしの良い所に移転し、福井藩三国代官をそこに配置して監督を強化した。三国湊は北は蝦夷湊（北海道）佐渡湊（新潟県佐渡島）出雲崎湊（新潟県出雲崎町）直江津湊（新潟県上越市直江津）と往来、西は敦賀湊、小浜湊、丹後由良湊、浜田石見湊（島根県浜田市）と交易して発展してきた。寛永二一年（一六四四）四月一日（この時は寛永で十二月十六日改元正保元年になる）、三国町の対岸から新保浦の船頭、竹内藤右衛門、竹内藤蔵、国田兵右衛門ら五八人が三艘の船に分乗し、三国湊を出帆した。松前（北海道）に向う途中、佐渡沖で暴風雨にあい、ソ連国境付近に漂着した、そこで竹内藤右衛門ら四三人が土民のために殺された。生存者十五人は奉天（現中国東北地方の瀋陽）を経て清朝の首都北京に護送されて優遇を受けた。後に朝鮮の首都京城を経て鎖国日本に帰ったのであった。その漂流物語は「韃靼漂流記」あるいは「異国物語」とも称され世に流布していた。その内容は、三国湊出帆以来の漂流と遭難、奉天、北京への騎馬旅行、北京滞留時の待遇、京城を経て帰国する迄のいきさつを述べ、彼らの目に写った国の風物や実際の体験と幾多の見分を語ったものであった。さてさて三国湊にある三国神社の祭典であるが五月十九日から三日間、盛大に行なわれると云う事で町自体がそわしわしていて、街の整備が進められ細い物を取除く作業があちらこちらで進められていた。祭礼日には細かい町並に沿って四百軒以上の露店が並び、当日引かれる山車は江戸時代からの歴史を持つと云われている。元禄（一六八八～一七〇四）の頃は傘鉾を担いで歩いたが、宝暦（一七五一～一七六四）の頃から人形山車となり、明治（一八六八～一九一一）には三国湊の全盛を示すかのように十三米余りの高さのものも現われた。電線などのため今は小さくして町々を練り歩き、子供の美しい囃子に乗って練り歩き山車は雄大で湊町のエネルギーを感じさせると云われています。残念ながら私の旅と時期が一致せず不足であった。市街地の北側に観光地である「東尋坊」がある。復輝石安山岩の柱状節理は見事であり、冬の日本海から吹寄せる荒波に向い、岩には波の花が散る荒涼たる冬景色は一服の絵であり、多くの写真、映画等に写しだされ、世に知られる所である。さて、私の歩く「旅」は五月三日、四、五、六日と好天に恵まれて終った。この美しい日本海と

漁村、農村、市街地を歩きながら見たり聞いたり素晴らしい旅であった。夕方、三国駅（京福電鉄三国芦原線）に着き電車の乗客となる。北陸本線、小浜線、北丹後鉄道と乗り換え宮津駅に着いたのは深夜の十一時三〇分、明日の勤務を控えて帰宅を急いだ。

昔の人は大変な旅をした、遠くは日本海流（対馬海流）、太平洋海流（黒潮）に乗って大陸から文明、文化を持って日本に来た、「命」を賭けての旅で半世紀前迄は大事（オオゴト）であった。今はいろんな旅の機械、器具、施設が整い、安全な旅ができる。老いてもまだまだ旅を楽しみたいものだ。前回歩いた「経ヶ岬から潮岬」迄は体力を賭けた旅であったが今回は「海と山と歴史」を楽しむ旅であった。この旅にいろいろと御協力いただいた旅先の皆様に厚くお礼を申し上げ感謝して終りとします。

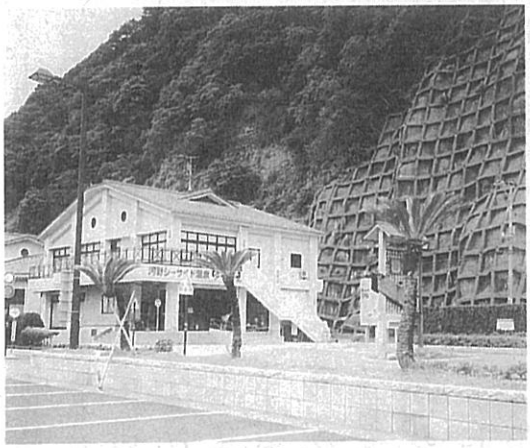
（終り）



三方町世久見　渚遊歩道
三方海中公園　鳥辺島を望む

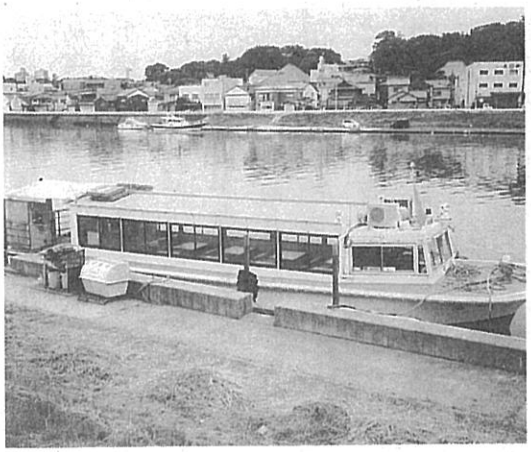
敦賀街道（8号線）阿曽（アソ）から杉津（スイヅ）を望む

河野村役場
第十五回北前船研究会
（故）清水町長会挨



河野村営温泉
国道三〇五号線　河野海岸道路沿い
この温泉から見る夕陽は素晴らしい。

越前町　干飯崎
国道三〇五号線から望



三国町　九頭竜川
旧三国湊　対岸が三国町の中心部
手前観光船

平成二十三年度
全国中学生人権作文コンテスト京都大会
京都府人権擁護委員連合会長賞

生きている喜び

栗田中学校　二年　蒲原穂香

広い大きな海と山、目の前には水田という豊かな自然に包まれて生活している私。春には登山、夏には海水浴、秋には稲穂が豊かに実る、冬には甘酸っぱいみかん。年中すばらしい景色を眺める事ができる地域に私は住んでいます。

そんな私は、大きな災害を経験したことがなく命があります。

今回の、命の尊さ、はかなさを思い知らされる事になりました。それは、東日本大震災でした。自然の力にどうすれば人は勝てるのか、そう考えました。しかし、何一つ思い浮かびませんでした。

自然災害は思ってもいなかった時に起こり、大切なものを全て奪っていき、人の心までも空っぽにするのです。残された方のなかには、生きることへの希望をなくしてしまう方もあったでしょう。

毎日、自分の幸せを持ち、楽しく時には壁に突き当たり乗り越える、すばらしい人生を送っている人達がなぜ、その人生を生き抜けないまま死ななければいけないのかと、何ともいえない気持ちになりました。

特に、印象に残っているのは、宮城県南三陸町の防災センターの職員であった遠藤未希さんの話しです。津波に襲われたこの町で最後まで街の人達に逃げる事を呼びかけ、自分は逃げ遅れて命を失われたのです。私には、とてもできることではない。人間の誇りといえるほどの心を持っている。それは、未希さんが最後の最後まで人のために生きたことです。未希さんには、これから多くの未来・人生が待っていたのに、神様はなぜその未来を与えてあげなかったんだとまで思いました。未希さんは、誇りを持って自分の仕事を成し遂げられた方なのに、そんなすばらしい人の命が消えてしまいました。残酷です。人一人の命が消えることで、絶対に悲しむ人がいる。その悲しみは、亡くなった方と同じ大きさの悲しみだと心から思います。私は、未希さんとは何の関わりもありません。しかし、この方の最後のエピソードを聞いてとんでもない悲しみを感じました。

避難所に逃げた女性は「あの放送でたくさんの人が助かった。町民のために最後まで責任を全うしてくれたのだから」と思いやることばがありました。

でも、未希さんのことを「すばらしい人だった」で終わるのではなく、彼女に救われた人々は彼女の分も人生を元気に生きて欲しいです。それが、彼女への恩返しになると私は思います。

私は、この東日本大震災を通じて深く心に刻み込まれた思いがあります。

それは、今まで日常の生活を「暑い」とか、「勉強嫌いだな」、毎日同じことの繰り返しで嫌だと思い、やる気をなくしていました。しかし、この震災の事を学ぶなかで、こんな事を思っていたことに自分は何をしてたんだと気づきました。毎日を健康に過ごせることよりも多くの幸せを求めていたのです。そんな自分を何様だ?と思いました。それに、「最悪」なんてことばを

日頃使っていることにアホらしくなりました。

生きようとしていたのに生きられなかった人達に、申し訳なくなりました。自分のことを醜い人間だと思った瞬間でした。

これからは、自分自身が、毎日を健康に過ごさせてもらっていることに感謝して、壁が立ちはだかった時は、人生を生きているんだと思い、自分の前を立ちはだかる壁をズンズン壊して生きていこうと思います。生きている喜びをかみしめ、亡くなった人の命の分まで新しいことに挑戦する、突っ走る自分でありたいと思います。この大きな災害を、他人事ではなく日本人として、自分のことのように考えていきたいです。今、自分にできることは何か。

それは、被災の状況から目を離さない事ではないかと思います。半年たった今も家族の帰りを待っている人がいること、復興作業で一日が終わっていく人がいることなどまだまだ、これからが本当の復興なんだと思います。そして、私たちは生活上いつもよりエコを気にして過ごしていくことも大切だと思います。

小さいことですが、みんなが一つになれば、被災地の復興、そして、被災された方々の心の復興に役立てると思います。そして、何より多くの命が奪われたことを忘れず、自分の人生をおもしろくないもので終わらせず、元気にトライする人生にしようと思いました。

大雲川と由良川

舞鶴市　加藤　晃

畿北第一の大河である由良川本流の部分称は、美山川・大野川・和知川・天田河・音無川・小久保川などであった。明治二十九年の河川法施行以来河川名は公的には統一された。

本流の全体称は三つある。最も古くから使われた大川は、『日本三代実録』の貞観元年（八五九）の頃に神号として登場するが、加佐郡域において河川名として、先史以来唱えられていたことは明らかである。

ついで現れるのが由良川である。細川氏が丹後国を領有する際に作られたと考えられる『丹後国御旧領図説』図に記されている。

さらに近世に入って大雲川が雅称のごとく使われるようになる。近代には橋名・村名など公的な名称にも使われるに至る。しかしながらこの名称は、大芋川を趣ある文字に替えたもので、本来由良川の称ではない。

大芋川は、兵庫県篠山市の東部を流れる川で、南流して加古川となる。その大芋川が由良川と混同されるに至ったのは、優れた古歌についての誤解が広範に発生したことによる。

古代の天皇即位式である大嘗会において、国魂奉献のシンボルとして悠紀・主基両国の地名（故地交名）を織り込んだ和歌が作られた。承保元年（一〇七四）白河天皇の大嘗会の際、大江匡房が詠った「四方の海もかくこそあらめ大芋川ひと日も波の立つ時ぞ無き」は佳歌として広く愛好された。そして詠われた場を離れて鑑賞された時、丹波でこのように波が立つことなく流れる川は、由良川の他に無いと

いう理解を誰しも持つに至った。「おくも川」と固有名詞が織り込んであるにもかかわらず、これは由良川であるという誤解が席捲して行った。大嘗会という事象が忘れ去られ、大嘗会和歌など全く知らない階層にも和歌が愛好されて行くにつれて、「おくも川」とは由良川の別称・雅称であるという誤解が定着して行ったと考えられる。

ちーと知っ得

森鴎外生誕百五十周年

山椒大夫伝説は、大正四年（一九一五）森鴎外が中央公論に「山椒大夫」を発表してから広く知られるようになった。

鴎外は文久二年（一八六二）に現在の島根県津和野町に生まれ、東京大学医学部を卒業後医師として活躍しているが文学活動は明治二十二年（一八八九）頃から始めている。

由良脇園地に建つ森鴎外「山椒大夫」文学碑は昭和五十四年（一九七九）一月安寿姫、厨子王ゆかりの由良に、地方の精神的、歴史的文化遺産を後生に伝え、併せて観光文化の向上に寄与する為に建立されたものである。

また揮毫は、元衆議院議長、前尾繁三郎先生である。

森鴎外生誕百五十周年にあたり由良地域各所にある山椒大夫に関わる史跡（山椒大夫屋敷跡北野御膳宮、如意寺、汐汲浜、柴勧進、首挽松等）をもう一度訪ねてみたい。

そこに文化遺産の価値を再発見し、観光産業の発展に寄与するものを見出だすチャンスになるのではと思う。（飯澤登志朗）

森鴎外「山椒大夫」文学碑

編集後記

2012（H24）6月

私たちの日常生活の中で想定外の出来事が起きることが時にあります。今冬の積雪量がそれにあたります。何年振りかの大雪に由良ヶ嶽も例外ではありませんでした。恒例の由良ヶ嶽登山に備え、前もって登山道風倒木の伐採、東西頂上付近の草刈に観光組合の協力を得て登りますが、例年に比べ登山道の風倒木数一〇六本と非常に多いことが判明、とても素人の手では処理できないことが分かり森林組合にお世話になりました。四月二十九日当日は晴天にも恵まれ大した事故もなく二〇一名の大勢の方が登山を満喫されました。冬期厳冬なれば夏は猛暑と予報士が解説、原発停止中で電力不足、停電も考えられます。私たちが便利さを追求しすぎ温暖化をもたらしたと考えられます。今まで使いすぎたことを反省、「ウチワ」片手に節電に協力しませんか。（枝川）